

目的 前報に同じ

方法 前報に同じ

結果 明治期になつて労働者の外歩きのほきものは、依然としてわらじであつた。わらじは耐久力をしく／日／足は必要で、その上当時の賃金からみるとかなりの重担であつた。35年頃阪神・岡山地区で足袋底に加硫ゴムを縫いつけた足袋が作られたが、じきに縫い糸が切れ、水が入りやすかつた。石橋正二郎が苦心の結果大正12年に発売した底の離れないゴム底足袋は甲と底ゴムを密着させて作るもので、これとはくだけで直接地上を歩行できる軽快さと耐久性・経済性から労働者のほきものとして遂にわらじを退けてしまった。

地下足袋はわらじの独特の作業用ほきものとして50年以上農業・林業・建築業者に広く浸透してきたが、1950年の約3000万足の生産をピークに、オイルショック以後農村の機械化による人口減少もあつて需要は後退しつつある。

製作上からは底を糸で縫いつけた「縫いつけ地下足袋」と「はりつけ地下足袋」に分けられる。はりつけは安価で耐水性はあるが重く、手縫いつけは足に密着し足のかえりか良いので高層建築のトビ職に根強い需要がある。しかし建築業法で種々の制約があり作業靴にとつて代られようとしている。前報のわらじがけは実用品から儀礼用に形式昇格し、出初式・消防殉難者慰霊祭・祭礼用に今も使われているのが現状である。